

子どもの健康と病気の予防②6

- 百日咳 -

小宅医院 小宅民子

激しい咳(せき)が特徴で子どもが感染しやすい細菌性の感染症「百日咳」が流行しています。大分県でも増加傾向にあります。百日咳は、百日咳菌が感染しておこる咳を主とした急性の呼吸器感染症です。感染力が強く、6か月未満の乳児がかかるとう呼吸不全など命に関わる場合があります。

感染経路は、鼻や喉、気道からの分泌物による飛沫感染や、感染者と接触したりすることによる接触感染とされています。

通常7〜10日間の潜伏期間を経て、①カタル期(普通のかぜ症状で始まる。約2週間持続)、②痙咳期(特徴のある発作性のけいれん性の咳がでる。約2〜3週間持続)、③回復期(激しい発作性の痙咳が減り、回復へ向かう。2〜3週間に分けられます。よくなるまでに2〜3か月かかります。

百日咳の治療には、一般的に

生後6か月以上の患者において、マクロライド系の抗菌薬が用いられます。初期のカタル期に開始した場合は症状が軽くなりますが、痙咳期に入るとあまり効きません。カタル期に百日咳と診断することが重要ですが、実際は普通のかぜと同じ症状なので早めの診断が難しい病気です。

予防は五種混合ワクチンを受けて免疫をつけることです。生後2か月になると接種できますので、早めに受けましょう。百日咳のワクチンの効果は数年から10年前後で低下するため、小学校入学前に追加の予防接種が必要です。津久見市では、就学前(年長児)に三種混合(ジフテリア・百日咳・破傷風)の助成を行っています。無料で接種できます。



「百日咳」の5つのポイント!

- ① 感染力が強く、6か月未満の乳児がかかると呼吸不全など命に関わることがある
- ② 感染経路は、飛沫感染・接触感染
- ③ 症状は「カタル期」・「痙咳期」・「回復期」に分けられる
- ④ 治療はマクロライド系の抗菌薬
- ⑤ 予防は、生後2か月からの五種混合・年長児での三種混合

